

卒後 2 年目看護師を対象とした「急変時の対応」研修プログラムの評価 急変経験調査と研修後アンケートから

キーワード：急変対応 急変経験 卒後教育

○大秦恵子 大川智美 橋元春美 小城智圭子(京都府立医科大学附属病院)

光木幸子 眞鍋えみ子 岡山寧子(京都府立医科大学看護学科)

1. はじめに

A 大学病院では、学士課程 4 年生から卒後 3 年目までの看護師の看護実践能力の向上を目指し「一人前看護師教育プログラム」に取り組んでいる。その取組みの 1 つに「救急看護」の研修を位置付けている。そして、「生命に直結する症状や兆候についてのフィジカルアセスメント能力をもち、適切な救急処置対応と患者中心の看護ができる」を目的に、シミュレーション学習を取り入れた教育を行っている。本研究では、2 年目を対象とした「急変時の対応」研修プログラム後のアンケート調査と、急変経験の実態調査から研修の効果及び次年度への課題を検討する。

2. 研究方法

1) 対象：卒後 2 年目の看護師 40 名

2) 実施期間：平成 23 年 9 月～12 月

3) 方法：研修前に、臨床での急変処置の経験の有無を 10 項目(図 1)について回答を得た。また、研修終了後に自己記入式アンケート調査票にて、研修の有効性、業務への有益性に対し「大変良い」「良い」「普通」「やや悪い」「悪い」で回答を得、自由記載による感想や意見の記載を求めた。

4) 「急変時の対応」研修プログラム

目標 (1) 2 次救命処置が理解でき、蘇生チームメンバーの一人としての役割を学ぶ。(2) 2 次救命処置に必要な物品や薬品、ME 機器等を理解できる。(3) シミュレーションを用いた蘇生体験により、知識と技術を統合・向上させることができる。

事前学習 「1 次救命処置、2 次救命処置の DVD 視聴」と「自部署の救急カーットの挿管必要物品の点検」

研修内容 ①講義：救急看護認定看護師による「2 次救命処置やチーム蘇生、家族への精神的援助について」(30 分)、②演習：インストラクターによる「挿管助動と安全な除細動」のデモンストレーションと実習(55 分)、③シミュレーション学習；「患者急変発見時の看護師の対応」(30 分)。シミュレーション学習の内容は、スキルラボでシミュレーター(ハートシム 3000®)を使用し入院時に近い環境を設定の下、インストラクターによる蘇生のデモンストレーション後、インストラクターが医師 A、B 役を行い、2 年目看護師が看護師 A、B、C 役を演習した。演習していない 2 年目看護師はチェックリストを使用し看護師の行動と 1 次～2 次救命処置の流れを確認した。また、演習後に全員で看護師の行動の振り返り、蘇生時の看護師の行動とチームメンバーとして看護師の役割について意見交換した。

3. 倫理的配慮

研修の開始前に口頭で研修前後の調査への協力は自由意志であり、同意しなくても不利益を被らないこと、個人情報保護、個人が特定できない形で結果を公表することについて説明し、調査票の提出をもって同意を得たとした。尚この研究を実施す

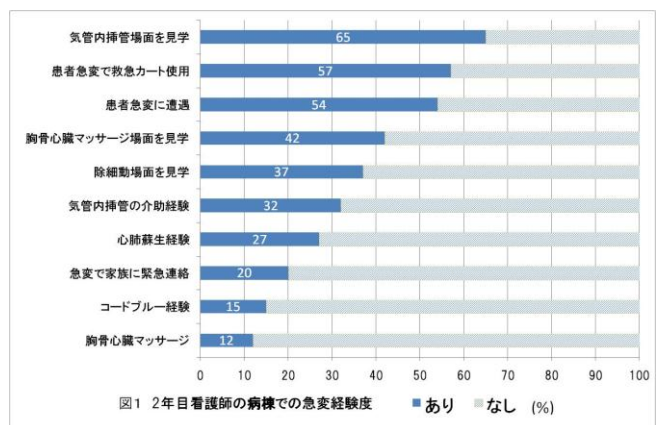
るにあたり看護部の許可を得た。

4. 研究結果

1) 2 年目の看護師の急変経験について(図 1)

調査票の回収率は 100%であった。

病棟での急変処置の経験度が最も高かったものは、「気管内挿管場面を見た」65%、最も低かったものは「胸骨心臓マッサージ」12%であった。



2) 研修の効果について

研修後のアンケートでは、研修内容については「大変良い」57.5%「良い」32.5%「普通」2.5%「無回答」7.5%、業務への参考「大変良い」75%「良い」17.5%「無回答」7.5%、内容の有効性「大変良い」65%「良い」25%「無回答」7.5%であった。自由記述内容として「演習できて実際に体験するだけで今後の対応につながると思う」等の意見があった。

5. 考察

2 年目看護師の半数は臨床で急変に遭遇していたが「心肺蘇生が必要な場面の経験」は 27%と臨床現場で蘇生を経験する場面は多くなく、急変時に必要とされる挿管や除細動、胸骨圧迫などの急変処置は臨床現場の OJT (on the job training) では学びの場が提供されにくいのが現実である。研修では、より臨床に近い場面設定の中で急変処置や蘇生場面を体験することにより「経験知」を習得することを重視し、病室に近い環境設定の中で蘇生シミュレーションを行うことにより講義で習得した基礎知識と技術を統合し自らが実践できる場面を提供でき、今後の臨床での実践に繋がったと考える。今年度はすべての参加者が看護師役を実演できなかったことから、今後は全員がシミュレーション学習に参加できるように研修時間を確保すること、e-ラーニングの活用による知識の定着を行っていくこと、研修による臨床実践能力の向上を評価できる指標を作成することが課題である。

本報告は、文部科学省平成 21 年助成事業「看護師キャリアシステム構築プラン」の一部である。